



五 再び、坂本の部屋にて

「坂本殿」

「うん。何？」宮本が話し掛けるものの、坂本は流れる雲を追い掛けるような、うわの空の返事だ。頭の中は、新規事業の、婚活プロジェクトのことで頭が一杯で、鼻や耳からも溢れだしそうだ。単に、お見合い会を開催しても人が集まるとは限らない。そんなことなら、他のイベント会社でもやっている。まして、そこから、カップルが生まれる確率はもっと低い。それでは、他の会社と同じだ。他の会社との差別化、違うことをやらないといけない。でも、違うことって、何？

「坂本殿」

「うん」宮本が、再び、声を掛けるものの、坂本は相変わらず、するめいかが生渴きのような、生返事だ。突然、坂本が宮本に向かって「宮本さん。何かいい知恵ない？会議の話を聞いていたんでしょ？」こうなれば、犬の尻尾、猫の手、ネズミの鳴き声、落ちていた落武者に助けを借りなければいけない。

「婚活プロジェクトの件でござるか？」

「うん。いくら考えても、いい知恵は浮かんでこないんだけど。編集長の言う通り、お風呂に入って頭をシャンプーしたけど、何も浮かばないよ。本当に、婚活プロジェクトって成功するのかなあ。編集長は独身だから、単に、自分が結婚したいだけなんかじゃかないかな。それで、スタッフに無理矢理に考えさせているんじゃないのかなあ。ふう」ため息と一緒に、ため口もつく。

「まあ、夕食でも食べるでござる。腹が減っては、戦はできぬでござる」

テーブルの上には、宮本が作った料理が所狭しと並んでいる。元々、一人用のテーブルなので、二人分の皿が並ぶと、箸やスプーンの置き場がないのだ。

「うん。そうしますか」坂本は家に帰ってから、ずっとソファに寝転がったまま、婚活プロジェクトについて考えていた。その間に、宮本が坂本のために夕食を作ってくれていたのだった。

「へえ、ハートか。可愛いじゃない」

料理はオムライスとサラダとスープ。オムライスの上には、ケチャップでハートの絵が描かれていた。

「ははあ。これはハートと言うのでござるか。確かに面白い形でござるな。この料理の本に載っていたので、真似してみたのでござる。これは何の意味でござるか？」

「ハートの意味を知らなかったんだ。つまり、ここだよ」坂本は自分の心臓の辺りを服の上から軽く叩いた。

「心の臓でござるか。これまで敵の胸を斬りつけたり、刺したりしてきたでござるが、心の臓がこんな形とは知らなかったでござる。坂本殿は物知りでござるな。ひょっとして、坂本殿も人をあやめたことがあるのでござるか？」宮本が感心しながらも、自分の言葉に反応して、刀の柄を握った。

「ちょっと、やめてよ。僕は侍じゃないんだから。人はもちろんのこと、犬も猫も殺したことはないよ。でも、蚊は叩いてつぶしたことはあるけど」

「それなら、十分、生き物殺してござる。拙者と同じ、武士と言ってもおかしくはないでござる」宮本は坂本の肩に手を回して、肩を組んだ。

「そんな大げさな。蚊ぐらいなら、小学生でも刺されたら叩いているよ。それに、このハートは、心臓の形じゃなくて、気持ちを表現しているんですよ」

「気持ちですか？気持ちを形に表すことができるのでござるか？それはどんな魔術でござるか？拙者も是非、教えていただきたいでござる。刀や矢だけで戦う時代は終わったと感じているところでござる」今度は、坂本の前で、土下座をする宮本。

「また、今度ね」坂本はこれ以上話を続けるとだんだんとややこしくなりそうなので、適当に相槌を打つ。

「とにかく、よかったでござる。このハートで、少しでも坂本殿の気持ちが和めば拙者としては嬉しいでござる」

「宮本さんは、見た目と違って、やさしいんだね。ありがとう」

宮本は相変わらず、ざんばら髪で、鎧を着て、体中に矢が刺さっている。初めてみた人は当然驚くだろう。坂本も慣れたとは言え、夜中にトイレに行きたくなって起きて、暗闇で宮本の姿を見れば、思わず「幽霊！」と叫んで、おしっこをちびりそうになる。

でも、坂本がいろいろと気を遣ってくれてはいるものの、宮本の本の心は、青い澄み切った空ではない。雲なのか霧なのか、黒く濁り、どちらの方向に進むべきなのか迷っている。船頭が多くて前に進めないことがあるが、今は、その船頭すらいらない状態だ。婚活イベントのことが頭から離れないのだ。考えれば考えるほど、煮詰まってしまう。料理なら、ひと晩置いたカレーが美味しいように、煮詰まった方が深く濃い味が出るのだろうが、考えが煮詰まると脳みそが脳から中脳、小脳と委縮していきそうだ。その隙間に、空っ風が吹く。婚活。婚活。こんかつ。こんかつ。とんかつ。とんかつ。とんかつが食べたい。思わず口走ってしまう。

「坂本殿は、オムライスじゃなく、とんかつを食べたかったのでござるか」宮本が急に顔を曇らせた。坂本は慌てて訂正する。

「オムライスでもいいんだけど、いや、オムライスが食べたいんだけど、つい、口走っただけだよ。宮本さん。本当に、婚活イベントに、何かいいアイデアない？」と、宮本に急いで相談を掛ける。

それは切り札なのか、あきらめの境地なのかはわからない。ただ、期待していないことはわかる。そう、つい、口から洩れただけなのだ。

「そうでござるか。折角、相談を受けたのでござるが、拙者は所帯を持ったことがないので、婚活と言われてもよくはわからないでござる」宮本は根っからの人柄の良さなのか、坂本の口走りにも丁寧に答える。

「いや、いいですよ。悩みを話ただけで、すっきりすることができたよ。ひと晩寝たら、いいアイデアも浮かぶんじゃないか」

坂本はこれ以上宮本に話すと迷惑をかけそうなので、婚活イベントについては早々に話を打ち切ることにした。

「それなら、いいでござるが・・・」

宮本はまだ何か言いたかったようだが、坂本が話を打ち切ったので、それ以上、話を続けることをやめた。その時、窓の外で、ふぎやあ、ふぎやあと叫び声が聞こえた。猫だ。それも喧嘩している。縄張り争いか。

「やかましい」

坂本は窓を開けると、声がある方に向かって叫んだ。婚活イベントのアイデアが浮かばないために、猫への八つ当たりだ。さっきまでは、婚活イベントのアイデアで、猫の手までも借りたいと思っていた坂本だが、いざ、猫が本当にやってくると、邪険な扱いになる。人間とは勝手なものだ。

宮本も坂本の背中越しに窓の外を見る。そこにはベランダがあり、二匹の猫が体を丸め、いつでも飛び掛かれる態勢で、相手を威嚇しながら向き合っていた。一方は三毛猫、もう一方は黒猫だった。

「こら、こら、仲良くするでござる」

宮本は自分の体から一本の矢を抜くと、弓に矢をつがう。

「ええ、猫を矢で射るの。殺す気なの」坂本は驚いて、宮本の肩を掴もうとする。

「まあ、見ていたらわかるでござる」宮本は肩にかかった宮本の手をはずす。そして、いがみ合っている三毛猫と黒猫に目がけて矢を放つ。矢は三毛猫と黒猫の間を通り抜けると、ブーメランのように宮本の手に戻ってきた。宮本はその矢を掴むと、再び、自分の体に突き刺した。

その曲芸のような様子に驚き、坂本は口を開けたままでしゃべることができなかった。しかも、さっきまで威嚇し合っていた猫たちは急にじゃれあいはじめたではないか。

「なんで」坂本はポップコーンが口から溢れるように、ポカンとして宮本の顔をじっと見つめた。だけど、宮本はごく当然の顔をしている。あれほどいがみ合っていた猫同士が急に仲好くなるわけではない。矢だ。宮本が射た矢が何か関係しているのだ。

「宮本さん。その矢に何か仕掛けがあるのですか」

「ああ、この矢でござるか」

宮本は自分の体に戻った矢を掴む。

「拙者もよくはわからないのでござるが、仲が悪いもの同士の間はこの矢を射ると仲が良くなるのでござる。これまで、多くの人を殺してきた矢が、悔悛して、人のために役だとうとしているのではないかと思うのでござる」宮本が矢を愛おしく撫でる。

「ふーん」

坂本は納得したような、納得できていないような、二つの感情が入り混じった返事をした。でも、目の前で、あれほどいがみ合っていた猫が仲良くじゃれあっているのを見ると、宮本の言うことを信じざるをえない。

「でも、体全体に矢が刺さっている宮本さんはどうなんですか」

素朴な疑問を発する。

「あくまでも、この矢が体の付近を通過しないと効き目がないようでござる。拙者のように、矢が突き刺さったままでは、何も変わらないでござる」

それでも、宮本の性格は落武者？にしては大人しい。丁寧だ。矢の効果が少しはあるのかもし

れない。

「そうだ。いいことを思いついた」

婚活プロジェクトに宮本の矢を使おう。宮本に参加者全員に矢を射てもらう。敵同士でも仲が良くなるのであったら、見知らぬ者同士にも効果はあるだろう。そうすれば、全員がカップルになれる。全員がカップルになれるイベントならば、人気に火が付き、みんなが応募してくるはずだ。そうなれば、このイベントも必ず成功する。

「宮本さん。お願いがあるんですが」坂本は猫の手じゃなく、自分の手を合わせる。

「坂本殿。改まって、どうしたんでござるか」

「実は・・・」

坂本は宮本に自分のアイデアを披露し、是非とも、協力してもらえようお願いします。

「はあ。坂本殿には世話になっているから、頼みはかなえてあげたいでござるが、ただし、残念なことに、矢の効果も一時的なものでござるよ。ほら」

ベランダの猫はさっきまでじゃれあっていたのに、今では、そんなそぶりも見せずに、お互い素知らぬ顔でどこかに立ち去ってしまった。

「いや。いいんですよ。そのイベントの時だけでも仲がよければ、パートナーが見つければ」

「坂本殿がそこまで言うのならば、いいでござる」

宮本は少し首を傾げながらも、頷いた。

「ありがとう。宮本さん」

坂本は宮本の手を強く握り締める。

「でも、拙者は、この姿ですよ。この姿のままでもよろしいのでござるか」

宮本が疑問に思っていたことを口に出した。確かに宮本の言うとおりで。ざんばら髪に、体中に矢が突き刺さっている。宮本の姿は婚活プロジェクトよりもお化け屋敷の方がよく似合う。そんな姿を見たら、参加者たちは、男性も女性も引いてしまうだろう。そうなれば、婚活プロジェクトは失敗に終わる。それよりも先に、編集長たちに宮本が参加することに反対されるだろう。

「うーん」再び、坂本は再び悩み始めた。

「折角、いいアイデアだと思ったのに・・・」

坂本はひと晩中、夢の中でもうなり続けた。